

夢十夜

夏目漱石

第三夜

こんな夢を見た。

六つになる子供を負^{おぶ}つてる。たしかに自分の子である。ただ不思議な事にはいつの間にか眼が潰^{つぶ}れて、青坊主^{あおぼうず}になつてゐる。自分が御前の眼はいつ潰れたのかいと聞くと、なに昔からさと答えた。声は子供の声に相違ないが、言葉つきはまるで大人^{おとな}である。しかも対等^{たいとう}だ。

左右は青田^{あおた}である。路は細い。鷺^{さぎ}の影が時々闇^{やみ}に差す。

「田圃^{たんぼ}へかかったね」と背中で云つた。

「どうして解る」と顔を後ろへ振り向けるようにして聞いたら、

「だつて鷺^{さぎ}が鳴くじゃないか」と答えた。

すると鷺^{さぎ}がはたして二声ほど鳴いた。

自分は我子ながら少し怖^{こわ}くなつた。こんなものを背負^{しよ}つていては、この先どうなるか分らない。どこか打遣^{うつち}やる所はなかるうかと向うを見ると闇の中に大きな森が見えた。あすこならばと考え出す途端^{とたん}に、背中で、

「ふふん」と云う声がした。

「何を笑うんだ」

子供は返事をしなかつた。ただ

「御父^{おとつ}さん、重いかい」と聞いた。

「重かあない」と答えると